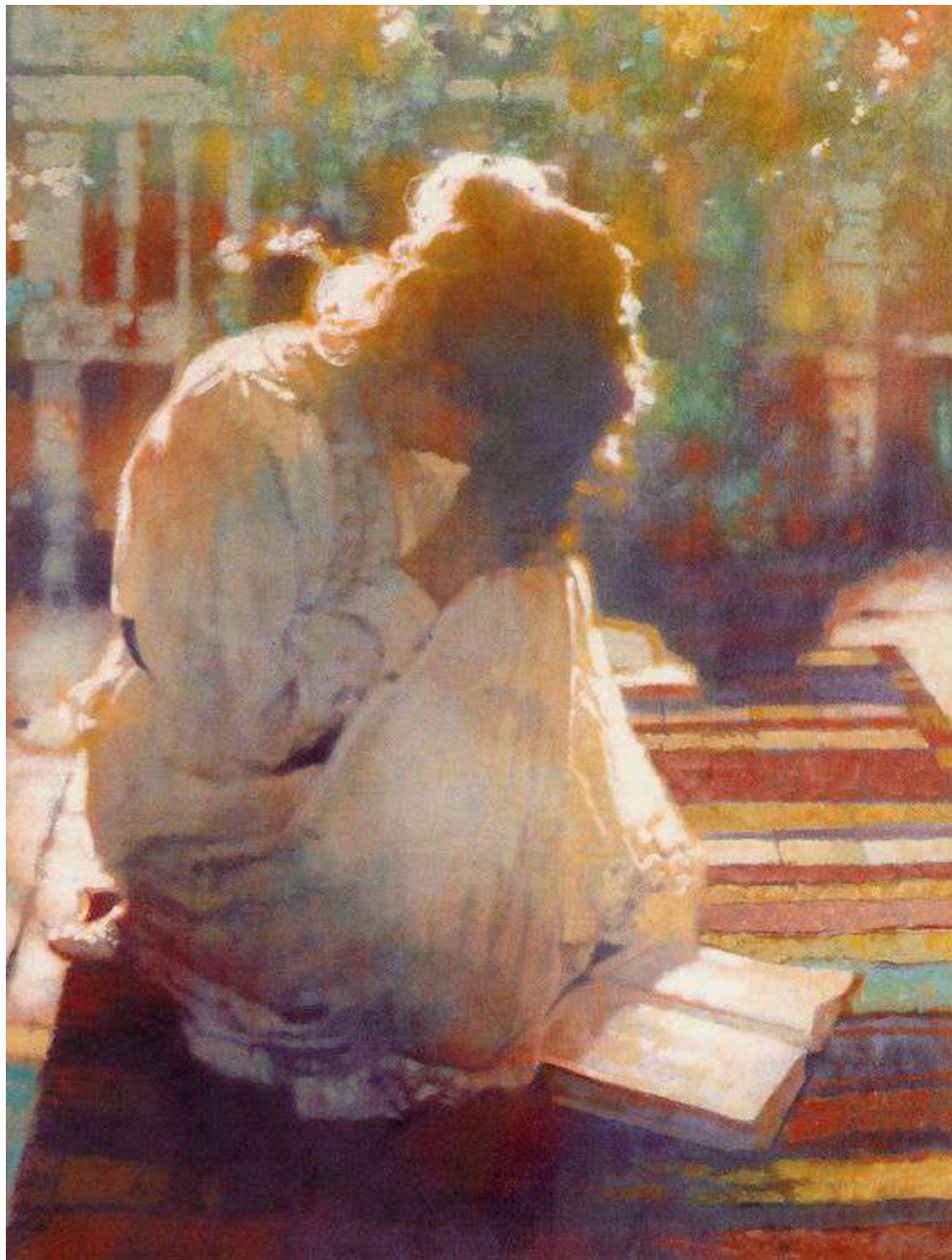

発達理論の学び舎

Back Number: Vol 267

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 5321. 月夜のキャンバス～一瞬一瞬という芸術作品
- 5322. プルースト的な回顧を通じて
- 5323. 今朝方の夢
- 5324. かかりつけの美容師のメルヴィンとの対話より
- 5325. シュタイナー教育の価値と意義～それらを貶めるもの
- 5326. 毎日外の空気を吸うこと
- 5327. ある心象風景:「知的早産」を引き起こす現代の教育及び人材育成
- 5328. 「知的早産」を逃れ、継続的な自己教育の実現を促してくれたもの
- 5329. 感動に打ち震える今朝方の夢
- 5330. 音声ファイルを作りながら:言葉に宿る命について
- 5331. 大学再入学に関する夢
- 5332. 今朝方の夢の続き
- 5333. ヨーゼフ・マティアス・ハウアーとの出会い
- 5334. ルシファーとアーリマン:目には見えない霊的存在を認めることについて
- 5335. コミュニケーションと私たち
- 5336. 贈り物を通じた喜び
- 5337. 今朝方の夢
- 5338. 心身の調律とシャドーワークについて
- 5339. ゼミナール用の音声ファイルを作りながら
- 5340. 今朝方の夢

5321. 月夜のキャンバス～一瞬一瞬という芸術作品

真っ暗な闇のキャンバスに白銀色に輝く満月が見える。満月の下には時折うっすらとした雲が散歩している。雲は満月に挨拶をするかのように満月の前を横切っていき、向かうべき場所にゆっくりと向かっている。

時刻は午前4時を迎えようとしているのだが、早朝にこのように満月を眺めることのできる幸せを感じる。ルドルフ・オットーの言葉を借りれば、ヌミノーゼ、つまり聖なるものを敬い、それに対して畏怖の心が生じている。

確か昨日の日記に書き留めていたように、ここでもまた黒の持つ偉大な力とその恩恵について考えさせられてしまう。宇宙空間という全き闇のおかげで、満月がこのように輝きを持つものとして認識することができる。闇夜というキャンバスに描かれているのは満月だけではない。そこには、満月を眺めている自分の心の有り様もまた描き出されている。

黒の力のなんとという偉大さ。今日の満月は、書斎の窓からではなく、食卓の窓の方から眺めることができる。食卓の窓は書斎の窓と違い、正方形のものであり、サイズも少し小さい。その窓枠が額縁となり、窓を通じて、闇夜と月が織りなす幻想的な生きた絵画がそこにある。ゆっくりと行進するうっすらとした雲を含め、この生きた絵画は少しずつその表情を変える。見ていると全く飽きを感じさせない素晴らしい作品だ。

この世界で起こる一瞬一瞬は、それぞれ尊い芸術作品であったか。もうそうなってくると、一瞬一瞬は芸術に他ならないのだと思われてくる。そうであれば、一瞬一瞬の総体としての人生を生きるというのは、芸術を生きることに他ならないのだと思う。

昨日に考えていた雑多なことを少しばかり思い出す。祈りと行為を分けてはならないのだという気づきがそういえばあった。祈りながら行為をなし、行為をなしながら祈る。祈りと行為は密接不可分な関係にあって、そのどちらか一方を通じて生きるのではなく、絶えず祈りながら行動し、絶えず行動しながら祈るという生き方をしていこう、というようなことを昨日考えていた。作曲実践に関して言えば、12音技法に対して再度関心が高まっている。この技法の二つの最大の特徴である、表現の奥行きと簡潔さは、日本的感性と親和性があるかもしれない、という気づきが芽生えていた。しばらくこ

の技法から離れていたが、毎日少しずつ実践を通じた探究をしていきたい。12個の音を選び出すことは、どこか12人の使徒を召喚する感じであり、12個の音を通じて、彼らと共にその瞬間の内的感覚の彫刻を彫っていく。そうした彫刻作品を作るに際して、改めてリズムを学んでみたいと思った。特に、インドの音楽や日本の音楽に独特のリズムを調べてみようという考えが芽生え、いくつか参考文献になりそうなものを見つけた。それらの書籍についても近々購入するかもしれない。

それともう一つ、内側で音の形になることを待つものを統一的なものとしてまとめ上げていく一つの力として調性があるのであって、調性が絶対的に先に存在しているわけではない、という気づきも芽生えていた。つまり、調性というものは絶対的に従わなければならないものではなく、それは内的感覚や音楽的観念を一つの形にしていくための統一的な力、すなわち一つ的手段に過ぎないのだ。そこから発想を少し変えると、調性に代わる統一力を持つ手段を用いれば、内的感覚をまとまりのある音にしていくことが可能だということになるだろう。12音技法はまさにその一つ的手段である。

ハーモニーはひよつとすると、また別種の統一力を持つと考えた方がいいかもしれず、この点についてはまた改めて考えたい。垂直的な統一力、水平的な統一力、さらに曲としての総体を作り上げていく統一力など、様々な統一力が考えられそうであり、それぞれの力を生み出しているものが何であり、それを生み出す手段について考えていこう。だがあくまでも、それらは音をまとめていく力に過ぎないのであるから、作曲において重要なことは、出発点として兎にも角にも角にも主題となる内側の感覚や音楽的観念があるかどうかなのだと思う。フローニンゲン:2019/12/10(火)04:14

5322. プルースト的な回顧を通じて

今朝の起床は午前3時であり、起床から気づけば1時間半が経った。14日間の断食を行った効果か、身体が生まれ変わり、そしてそれに応じて睡眠の質も変化したように思う。端的には、以前よりも良質な睡眠が取れるようになり、その時間も短縮されるということが自然と実現された。毎日10時前には就寝するため、大体5時間ぐらい眠っている形になるだろう。今の自分にとってはそれくらいの睡眠が最適のようであり、午前3時あたりに起床することで、正午までの午前中に、創造的な活動に従事するための時間を多く確保できることはこの上ない喜びである。

目が覚めた瞬間に午前3時であると、もう嬉しくなってしまう。そこから創造活動に没頭できることを思うだけで、もうたまらなく嬉しくなってしまうのである。こうした嬉しさは今朝も感じたのだが、今朝はそれとは別に、びっくりしてしまうことがあった。それは、今ここにこうしてあるということに対しての驚きだった。

瞑想的な意識の中でヨガをしている最中、東京で過ごしていた幼少時代のことが自ずと思い出され、あの時の自分が今ここでこのように生きているということに心底驚いてしまったのである。時系列上、幼少時代のその時を一つの点とみなし、そこから現在をまた一つの点として人生を眺めてみたときに、それらの距離と歩みに対して、本当に驚嘆してしまったのである。人生はそのままで奇跡だと言われるが、本当にその通りである。

誰がああの時の自分が今このような自分になっていると思うだろうか。自分自身も、東京で過ごしていたあの幼い子供が、今こうして北欧にほど近いオランダの街で生活をしている姿など想像していなかったはずなのだ。人生は本当に、一つ一つの奇跡の集積なのだと思う。そして、人生という一つの総体もまた奇跡的な産物なのだろう。

過去に対するプルーstens的な回顧が続く日々。私はひよっとすると、プルーstensが『失われた時を求めて』で行っていたことを、全く違う形で同じく行っているのではないかと思わされた。それが日記の執筆であり、作曲なのだろう。それらは自分にとってプルーstens的な営みであり、人生の一瞬一瞬という奇跡に対する返礼行為だったのだ。

過去の回顧を通じて自らを知り、自らを開いていくということなどは二の次であり、それらは単なる副産物だ。何よりも、感謝と祈りが先である。人生の一瞬一瞬に対して、感謝の念を持ち、祈りを捧げられるかどうか。そしてそれをもとにして、自分の使命的な行為に没頭できるかどうか。私は感謝し、祈り、没頭しながら毎日を生きていく。フローニンゲン:2019/12/10(火)04:37

5323. 今朝方の夢

静けさの中に佇む自己。それを今感じている。

今朝はまだ夢についての振り返りをしていなかったもので、それについて振り返り、その後には早速早朝の作曲実践に入っていきたいと思う。夢の中で私は、周りには何もない線路の上にいる。厳密には、乗っていた列車が突如姿を消し、線路の上に投げ出される格好になった。「投げ出される」と言っても、列車から外に放り出されたわけではなく、気がつけば体が線路の上にあったのである。線路の周りは広々とした荒野で覆われていた。自分の近くに視線を向けると、そこには同じく列車から放り出された人たちがたくさんいた。その中に、小中学校時代の友人 (MS) がいた。彼は、私が東京から山口に引っ越した際に、山口弁を教えてくれた大切な友人である。

中学校を卒業して以来、彼に会うことはなかったので、彼の姿をみたときは嬉しくなり、彼に声を掛けた。すると、一刻も早くここから立ち去る必要性を彼は説いた。その理由は定かではないが、単純に次の列車が来るから危ないというものではないことだけはわかった。「一刻も早く」と述べていながら、列車を放り出された私たちは、線路上に落ちている物を拾う必要があった。その大半はゴミなのだが、中にはゴミではない物も混じっていた。私はその中で、書籍を拾い集めることにした。とは言え、あまり大量の書籍を持つことができず、さらには急いでその作業に取り掛かる必要があったから、私は一冊を手にしたところですぐに線路から離れた。線路から離れ、荒野の方に向かって行く際に、その友人の方を見ると、彼は小麦を拾っていた。何やらそれを拾って食糧にするとのことだった。彼が拾ったものを見て、こうした状況において何を拾うかは、その人が大切にしている価値観や考え方が反映されるのだと思った。言い換えると、そこに生き方や人生そのものを見て取ったのである。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、ジュンク堂が舞台となっていた。厳密には、ジュンク堂大阪本店がその舞台となっており、私はジュンク堂のあるフロアにいた。そこで何の書籍を探していたのかはわからない。いや、むしろ私は書籍を探していたというよりも、人を探していたようにすら思える。ここでもまた、私は誰を探していたのかは不明である。

フロアを歩いていると、そこに小中学校時代の友人 (TS) がいた。彼は野球部に所属しており、彼は野球部の友人と一緒に書店を訪れていたそうなのだが、彼らとはぐれてしまったようだった。その点において、彼もまた誰かを探す身であった。私は彼とその場で少し立ち話をした後、自分が探すべき人を探すために再び歩き始めた。すると、あるコーナーの棚に差し掛かった時、何人かの人たち

が、まるでこれから二人三脚でもするかのように、お互いの足を紐のようなもので結んでいる姿が目に入った。

「いったい彼らは何をしているのだろうか？」そのようなことを思いながら彼らの方を見ていると、ゾロゾロと多くの人たちが彼らのところに集まってきて、彼らもまたお互いの足を紐で結びつけて、大きな列を作ろうとしていた。その列の先頭に偶然ながら、先ほどの友人とは異なる友人がいて、彼に話を聞いてみると、「こうすればお互いにはぐれることはない」ということを述べていた。さらに彼は続けて、「こうやって人と人とが足を結びつけていれば、安心感があるんだよ」と述べていた。

確かに、お互いの足が紐で括られた彼らの表情を見ていると、その安心感からか笑顔が見られた。しかし、しばらくすると、お互いに読みたい本が異なるため、棚の移動が困難であり、不協和がそこに生まれ始めた。「足の引っ張り合いというのは、こういうことを言うのだろうか」と私は思った。そうした光景を見た後に、私はエスカレーターの方に行き、下の階に降りることにした。するとそこはもう1階であり、結局探していた人が見つからなかったため、私は店を後にしようとした。

すると、向こうから友人がやってきて、私に声を掛けてきた。そこで立ち話を始めてすぐに、その場所がジュンク堂の大阪本店ではなく、丸善丸の内店だということに気づいたのである。その気づきが芽生えた時、なぜか私は両親の顔を思い浮かべた。そのような夢を今朝方見ていた。

書店の場所が思っていた場所と違うことに気づいた瞬間に、両親の顔を思い浮かべたのがなぜなのかはよくわからない。ある気づきが別の気づきを呼び込むという連鎖がそこにあった。それは一見すると飛躍しているのだが、同時に何かしらの関係がそこにあるのだと思う。夢をメモした紙を眺めてみると、「両親とジュンク堂に行った思い出？」と書かれていたが、2人とジュンク堂に行ったことはないように思われる。

上記で書き出された夢を改めて眺めてみると、書籍を探すというのは、人を探すことなのかもしれないと思わされた。そこから私は、書籍との出会いは、まさしく人との出会いなのだということに気付かされた。また、書籍の中でお互いの足を紐で結びつけている人についても改めて振り返ると、確かにそうした形で一種のつながりが生まれ、それに対して安心感を覚えるというのはよくわかる。だ

が、彼らを読みたい本が各々異なっており、各人が行きたい場所があることからわかるように、そうしたつながりは単なる拘束でしかなく、逆に生きづらさを生んでいるのだと思わされた。

夢の舞台が日本だったからか、外国人はそこにいなかった。仮に欧米人があのような形でお互いの足を紐で結ばれたら、あのような安心感が滲み出す表情を浮かべていたとは思われない。最初から不自由さと嫌悪の感覚があるのではないかと思われる。夢の中の私が感じていたように、やはりそこには、1人の人間としてこの世界に立つという自律的精神が弱く、お互いに足の引っ張り合いをする日本人の原型的イメージが投影されていたように思われる。フローニンゲン:2019/12/10(火)

05:11

5324. かかりつけの美容師のメルヴィンとの対話より

時刻は午後8時を迎えようとしている。つい先ほど小雨が突然降ったが、今はもう雨が止んでいる。先ほどの小雨を除けば、今日は本当に天気恵まれた。朝から太陽の優しい光が地上に降り注いでおり、天日干しにしていた椎茸も喜んでいるかのようであった。太陽の光の恵みを存分に受けた椎茸を先ほどの夕食でいただき、私もその恩恵を十分に授かった。

今日は午後3時から、かかりつけの美容師のメルヴィンの店に行き、髪の毛を切ってもらった。店に到着すると、まだ前の客の対応をしている最中であり、いつものようにメルヴィンは、私にコーヒーを勧めてくれ、いつものようにダブルエスプレッソをもらった。しばらくそれを飲みながらリラックスしていると、私の番となり、今日も1時間の間ずっと対話を楽しんでいた。

メルヴィンとの対話はいつも新鮮であり、毎回多くの気づきや発見を得させてもらっている。今日もたくさんそうした気づきや発見があり、店から帰る最中もそれらのことを反芻しながら、自分なりの考えを育んでいた。メルヴィンは、やはり活動する思想家であり、思想する活動家なのだということを改めて思った。本日の会話の中で、メルヴィンから来週の月曜日にユトレヒトのボルダリングジムに一緒に行こうと誘われたのだが、あいにくその日は協働プロジェクト関係の仕事が入っており、残念ながら断らざるを得なかった。だが、ちょうど私が年明けのミラノ旅行から帰ってきて、メルヴィンも冬の休暇を終えた後頃に、メルヴィンの家で夕食を共にしながらゆっくりと話すことになった。メルヴィン

と私にはいくつか共通した実践があり、今回はそのうちの一つの実践を共に行ってみようということになった。

彼のパートナーのスシは近々会社を辞めて独立しようと考えているらしく、今準備を進めている最中とのことであり、年明けのその日に一緒に過ごすことは難しそうだが、メルヴィンの弟を呼んで、3人で色々話をしようということになった。メルヴィンの家に行くのは1月末か2月初旬ともう少し先のことだが、今からその日が楽しみである。

メルヴィンとの会話の中で、オランダの企業社会の様子や教育の話になった。メルヴィンのパートナーのスシは、現在銀行で働いており、そこで様々な種類の、そして様々な質のコミュニケーション上の問題を目の当たりにし、そうしたコミュニケーションの問題に対して、まさにインテグラル理論的な観点で取り組もうとしている。彼女のアイデアについてメルヴィンから話を伺っていると、とても共感する内容であった。メルヴィンの話を聞いていると、対人、対物、対社会、対自然に関するコミュニケーションの問題の本質は、日本とオランダでさほど変わりはないのだなと改めて思った次第である。しばらくオランダの企業社会の問題について、特にコミュニケーションの問題について話し合い、そこからオランダの教育に話が移った。

一昨年あたりから、シュタイナー教育とシュタイナーの思想及び種々の領域における実践活動について探究をしており、シュタイナー教育を含め、オランダに馴染みの深い幾つかの教育手法についてメルヴィンに話を聞いた。メルヴィン自身はドルトンスクールに通っていたそうであり、まずはその教育手法について話を聞き、そこからモンテッソーリ教育、イエナプラン教育、そしてシュタイナー教育について意見交換をした。そうした形で話をしていると、あっという間に1時間が経った。お互いの間で沈黙の時間はなく、絶えずどちらかが話をし、どちらかが問いを投げかけるという形で時間が過ぎていくのは今日も同じであった。

帰り際、そういえばメルヴィンとスシが交際を始めてから4周年の記念日が近々あるということを思い出し—社会的な慣習ではなく、お互いの意思を尊重する形で交際のあり方を考えていくオランダ人のカップルらしく、結婚をしない形で今後も一緒に生活をしていくそうだ—、何か贈り物を送ろうかと思った。2人はコーヒーが好きだから、今度街の中心部にあるお茶・コーヒー専門店で、オーガニックのコーヒー豆でもプレゼントしようかと思う。フローニンゲン:2019/12/10(火)20:09

時刻は午前3時に近づきつつある。今朝は午前2時過ぎに起床し、そこから朝のルーティンを行い、この時間帯から一日の活動を始めるに至った。振り返ってみると、14日間の断食を終えてから、まだ2週間が経っていないことに気づく。昨日は、かかりつけの美容師のメルヴィンの店に行き、髪を切ってもらっていた。その際にも、14日間の断食について話題が及び、断食中に起きた体験などをメルヴィンに共有していた。

14日間の断食を通じて、身体の器官がまるで生まれ変わったかのように機能がなお一層健全なものになり、断食を終えてから心身の状態がすこぶる良い。それは睡眠の質にも直接的な影響を与えている。

以前の睡眠も質は決して低いものではなかったと思われるが、今のそれは以前と比較にならないぐらいに高い。そのおかげもあって、夜の10時から今朝のように2時ぐらいまで睡眠を取れば、もう十分すぎるほどに身体が回復しており、すっきりとした目覚めと共にそこから一日の活動を始めることができる。今朝のように、2時半あたりから活動を始めると、正午までに9時間半ほど活動時間があり、正直なところ、もう午前中だけで自分の一日の取り組みを終えることができちゃう。一般的に、勤め人の場合、勤務時間は8時間から9時間ほどであろうから、午前中だけで彼らの1日分の仕事時間を確保することができていることになる。実際には、昼に軽食として4種類の麦のフレークを食べた後にも、仮眠を挟んで、寝る1時間前の夜9時頃まで自分の取り組みに従事しているため、午後から就寝までにも8時間ぐらいの活動時間が確保されていることにふと気づく。そうした活動時間に、ゆったりとした気持ちの中で、日記の執筆、作曲、読書などを行っている。今日もまた、落ち着いた心を持って、自らの取り組みに従事していこうと思う。

昨日、シュタイナー教育に関する動画を共有した。本当は色々と思うことがあって一連の動画を共有したのだが、シュタイナー教育に関する自分の思いについては、徐々に日記の中で言及していきたいと思う。動画を共有する際に、短い文章を添えていた。その中で、シュタイナー教育の持つ固有の価値や意義について触れていたように思う。現在世の中には、多様な教育思想や実践があり、それは教育に関する多様性を確保し、教育の選択に伴う自由を考えてみれば、悪いことでは決してないように思う。しかしながら、一つ一つの教育手法に根差す思想や実践方法を人間発達の

観点から眺めてみると、やはりどの意識段階に基づいて構築された教育手法なのか、そしてどの深度までの発達を見通した教育手法なのかによって、各々教育には差があることがわかる。

そのようなことを考えながら、もし仮に人類が一つしか教育手法を残すことができないとなれば、私はその一つとしてシュタイナー教育を挙げたいと思う。ここでは詳細に説明しないが、端的にはシュタイナー教育が持つ幅(span)と深さ(depth)が他の教育手法に比べて広く深いからだ。とりわけ、人間発達の観点からすれば、霊的な成長の次元を考慮に入れた教育実践を行っているものは他にないのではないかと思われる。霊的な成長を教育の核に据えて、知的な教育、身体的な教育、芸術的な教育が、それぞれバラバラではなく統合的になされる点に、シュタイナー教育の大きな特徴があり、まさにそれはインテグラル教育と呼ぶにふさわしいものかと思う。

そこからふと、霊的(spiritual)なものと宗教的(religious)なものを取り違えたり、混同したりすることが世間では往々にして見られることに視点が向かった。このあたりの取り違えや混同ゆえに、シュタイナー教育の真の価値や意義などが伝わりにくくなっている可能性があり、それは非常に残念である。繰り返しになるが、シュタイナー教育の価値や意義は、自由への教育という思想のもとに、霊的な成長の次元まで押し広げた全人格的かつ統合的な教育を実践することにある。ゆえに、もし霊的なものを宗教的と受け取ってしまったら、霊的なものを理解の及ばぬいかがわしいものとして骨抜きにしてしまうのであれば、それはもはやシュタイナー教育とは呼べず、シュタイナー教育の価値や意義をひどく貶めるものになってしまうだろう。そのようなことを昨夜考えていた。フローニンゲン：

2019/12/11(水)03:11

5326. 毎日外の空気を吸うこと

真っ暗な闇の世界に小雨が降りしきる。起床した午前2時過ぎにおいては、雨は降っていなかったのだが、3時半を迎えようとしている今、小雨が天から降り始めた。幾分風もあるようであり、天気予報を確認すると、午前8時頃までどうやら小雨が降り続ける可能性があるようだ。幸いにもそこから晴れ間が見えるようなので、今日もまた身体の調整及びリフレッシュを兼ねて、近所の運河沿いをジョギングし、その足で近所のスーパーに立ち寄ろうかと思う。

思考も魂の躍動も、そして創造活動も、それらは全て身体を土台にしているため、身体を適度に動かしながらほぐしていくことを毎日行うことは大切かと思う。私の場合で言えば、それは起床直後のヨガと夕方近くに外にジョギング兼ウォーキングをすることが、そうした身体実践になる。身体をほぐした後の思考の状態や創造活動に向けたエネルギーの状態を眺めてみると、身体を動かすことの意義が明確なものとして掴めてくる。それは触感的にありありとしたものとして知覚できる。

確かにこの季節の当地の環境は厳しいが、過去の偉大な創造的な芸術家や哲学者は、寒さの厳しい環境にあっても、散歩などを通じて身体を動かしていたことが興味深い。とかく私の場合は、自分の内側の世界に籠ってしまいがちであり、そうした実践が多いため、なおさら対極に振って自己を外側に開く形で外の世界に身を置くことが大切なのだろう。それは些細なものでよく、1日に1度は外の空気を吸うために、ジョギングやウォーキングをするだけで良いかと思う。

色々と自分の身体を観察していると、例えば今朝のように雨が降っており、そうした雨が一日中続くと、家から一步も外に出ないことが過去にはあった。特に、フローニンゲンにやってきた最初の年はそうした傾向にあったかと思う。当地の雨は1日中降り続けることはあまりないため、雨が降らないタイミングを見計らって、今では極力1日に1度は外の空気を吸うようにしている。それは時間としては短かく、30分程度だろうか。だが、この30分がどれだけ自分をリラックスさせ、リフレッシュさせてくれるだろうか。その恩恵は計り知れない。

観察をしてみると、例えば1日中家に籠った後の翌日にジョギングなどをすると、心肺機能が数ミリ単位で弱っているのを感じる。足腰の筋肉も同様である。この点については、どうやら科学的な研究も進んでいるようであり、私たちの身体は、1日室内で放置しただけでも随分と弱ってしまうそうなのだ。とりわけ、足腰が弱ってしまうというのは、この地上に立つというグラウンディングの力を弱めてしまい、存在力 (presence) のようなものを弱体化させてしまうように思える。

地上にしっかりと自らの足を立て、グラウンディングしている人を見ると、当然ながら落ち着きがあり、存在感のようなものが全身から放射されているように思える。まさに「グラウンディング」というのは、ちょうど昨日友人かつかかりつけの美容師のメルヴィンとも話していた内容である。

フローニンゲンはこれからますます寒くなり、今後は雪も降ることだろう。そうであったとしても、白銀世界の素晴らしさを書斎の窓から眺めるだけではなく、それを触知し、自らの身体の調整とリフレッシュをするという意味も含めて、毎日できるだけ外の空気を吸いに30分ほどのジョギングやウォーキングを行おうと思う。それが自分の身体や存在を根底から支え、日々の創造活動を後押ししてくれる。何よりも、外の空気を吸うことは、世界が私に創造の息吹を吹き込んでくれる(“inspire”の語源通り)ことに他ならないのだと日々実感する次第である。フローニンゲン:2019/12/11(水)03:46

5327. ある心象風景:「知的早産」を引き起こす現代の教育及び人材育成

昨日、ふとしたきっかけで、変わり続けている自分に改めて驚いた。それはとてもシンプルな気づきなのだが、例えば4年前の自己と今の自己との間に見られる変化には打たれるものがあり、今から4年後の自分が一体どのような自己として世界に存在しているのかに意識が向かった。もちろん、4年後の自分がどのようになっているのかは未知であり、それが発達の本質なのだが、きっと今の自分からは想像もできないような自己がまたそこに現れているのだと思った。そのようなことを考えていると、私の心の中に、ある一つの心象風景が浮かび上がっていた。それは、変わり続けていく海岸の景色と、一方で海そのものがそこにあり続けるという変わらない景色であった。

自分が踏み締めた一歩によって砂浜に足跡ができて、また歩く。時間を空けて振り返ると足跡が消えているのだが、確かに自分はその砂浜を歩いたという絶対的な存在感覚がある。そして、この絶対的な存在感覚に気づいた瞬間に、新たな自分がそこにいることに気づく。心象風景の中で、私はそのようなことを思っていた。

シュタイナー教育についての探究を日々小さく行い、自らにシュタイナー教育に類することを実践している日々が続く。シュタイナー教育が、日本の英才教育で見られる単純に知的操作だけを鍛錬するようなことを絶対的に避けようとする態度には深い共感の念を持つ。そうした早期英才教育の弊害は、発達科学者のカート・フィッシャーやポール・ヴァン・ギアートを含め、随分と科学的に明らかになっている—それは通称「ピアジェ効果」と呼ばれるものである。

人間の魂の成長を見据えた上で、永続的な成長を実現させようとするシュタイナー教育。とにかく個人の魂の特性に配慮し、焦ることなくそれを育んでいこうとする態度。そうしたものがシュタイナー

教育の根底に横たわっている。上述の通り、単純に知的操作だけを行う知的教育をシュタイナー教育では避けるが、逆に五感や感性を育む教育は早期からしっかりと行うのはシュタイナー教育の大きな特徴だろう。発達理論の観点から見ても、身体及びそれに伴う感性の土台を小さい頃から焦らず大きく育てていくことは重要に思われる。

シュタイナー教育というのはひょっとして、植物の花を咲かせようと躍起になるのではなく、植物が育つ土壌を豊かにすることだけに焦点を当てているのではないかと思われてくる。世の中の多くの教育が、土壌を豊かに耕すことを蔑ろにし、農薬や化学肥料を用いて植物を強引に成長させようとするような傾向があるのに対して、シュタイナー教育のあり方はやはり希有である。

土壌を豊かに育てようとする結果として種から芽が出て、花が咲く。シュタイナー教育では、種から芽を強引に引き出そうとしたり、花を無理やり咲かせようとさせることは避けられているように思う。それがまさに、魂の存在を認めながらも、魂には触れないという態度の現れだろうか。言い方を変えると、内在的な発達力そのものに介入するのではなく、一人一人の子供たちが持つ固有の内在的な発達力が、あるべき姿で自然と発露するように環境を整え、その土台を作ってあげること

に焦点が当てられているのがシュタイナー教育かと思われる。

農薬や化学肥料を用いるような形で、発芽や開花を早めようとする教育は、そもそも芽が芽として地上に出てくるための目には見えない発達力や、花が開花するための目には見えない発達力を完全に見落としているのだと思う。それが結果として、「知的早産」につながるのだろう。知的早産というのは、無理に知的な成長を遂げてしまったがゆえに、他の知性領域・能力領域に歪みが生じ、意思力や行動力が低下し、自分が将来及び現在、何に向かって情熱を注いでいいのかわからなくなってしまう、生きる意味を喪失しかねない現象だと私は理解している。これは日本においては、21世紀にもなって相変わらず続いている、「受験」という名の教育上の徴兵制度のもとで見られる問題ある現象かと思われる。そして、知的早産は、形を変えて、私たち成人の多くが日常で多く経験していることでもあるだろう。それこそ、企業社会における既存の人材育成の類は、大抵この知的早産を引き起こすようなもののように映る。

私たちは新たな知性領域や能力領域の実践をする際には、まるで幼児のような段階から成長の歩み始める必要がある。それが人間発達の原理である。そうであるにもかかわらず、企業社会にお

ける人材育成は、生産性や効率化を推進しようとする動きの背後にあるイデオロギーや時代精神を完全に見落としているがゆえに、生産性や効率を高めるために、成長を加速させようとする無理な教育を成人に施す事態を生んでいる。なるほど、この間秋に日本に一時帰国し、そこで講演をさせていただいた時に、都市部、とりわけ東京で働く成人の多くが死んだ魚のような目をしていると述べたのだが、それはこうした知的早産の結果として生じているものなのかもしれない。フローニンゲン：
2019/12/11(水)04:31

5328. 「知的早産」を逃れ、継続的な自己教育の実現を促してくれたもの

時刻は午前4時半を迎えた。滴り落ちる雨の音を聞きながら、暖かいカカオドリンクを飲んで一息ついている。そして、先ほど書き留めていた「知的早産」や「ピアジェ効果」について考えていた。実はそれらについては、昨夜ベッドの上でも少し考えていたことである。自分自身を振り返ってみたときに、幸いにも両親のおかげで、私はこの知的早産を逃れたのだと思う。実はこの点については、秋に一時帰国して、実家に戻った初日の晩餐の際に、直接2人に感謝の言葉を述べたことでもある。自分の両親を褒め称えすぎるのは控えたいが、純粋に私は、父のことをルドルフ・シュタイナー的な人物だと思っているし、母のことをマリア・モンテッソーリ的な人物だと思っている。

幼少時代に東京の社宅で過ごしていた時、父が勤めている会社の性質上、その社宅に住んでいる親たちは軒並み高学歴であり、特に教育熱心な家庭が多かった。今でも鮮明に覚えているが、ある日、社宅の同じ学年の友人と遊んでいるときに、突然「今から塾に行く必要があるんだ。じゃあね」と言われたことがあるのを覚えている。

確かに、私も習い事はしていたが、それらはことごとく遊びの延長であり、それらは全て受験とは関係のないものだった。もちろん、全ての友人とは言わないが、当時の社宅にいた友人たちの多くは、中学校受験—下手をすると小学校受験—に向けて、塾に通っていたように思う。この点に関して、私を塾に通わせることをしなかった父と母には心底感謝をしており、その感謝の念を30代も半ばを迎えようとしている今年の秋に、改めてそれを言葉で伝えた。前々からこの点については感謝の言葉を伝えていたが、それをこれまでよりも明確な形で伝えるのは今回の一時帰国の時だったように思う。

母曰く、私は言葉を覚えるのが早く、口達者ではあったものの、文字、とりわけ日本語が読めるようになってきたなど自分で思い始めたのは28歳になってからだった。大学に入学するまでは本など一切読まず―読めず―、学生時代は優秀な友人たちに啓発される形で本を読み始めてみたものの、それはある意味形だけの読書だったように思う。とにかく、他者が書いた文章を読むのが苦痛であり、書かれている内容が自分の内側に入ってくるのがほとんどなかった。それは今となってみれば、そうした文章は結局魂が抜けたようなものばかりであり、自分の書籍の撰定が誤っていたとわかるのだが、文字を読むということに関しては、本当に長らく苦戦をしていたように思われる。

以前の日記でも言及したように、小学校時代の読書感想文は苦痛以外の何物でもなく、自由に執筆できる日記は毎日欠かさず書いていたのだが、本を読んでその感想を書くというのは、当時の私にとってはあまりにも過酷な苦行であった。なんとか頑張っ、最初の1ページぐらいは読もうと思ってみるものの、かろうじて最初の数行が読める程度であり、いつも最初と最後のページの数行だけ読んで、読書感想文用の原稿用紙を埋めていたことを今でも鮮明に覚えている。

両親は勉強一般に関して何も私に言ってこず、それが知的早産から私を救い、自分のペースで発達の歩みを進めることにつながったのだと思う。無理やり本を読むことがなかったがゆえに、私は成人となってから、水を勢いよく吸収する砂漠の根のように読書を始めた。そこでようやく読む楽しさがあり、少しずつではあるが、文字が読めるようになり、自分の肥やしとなっていっていった。それは読書のみならず、勉強全般に言えることであった。幼少時代から一貫して勉強することを強要されることが一切なかったために、結果として成人になってから勉学の楽しさに目覚め、それは会社を辞めて留学するほどに強烈なものであり、気がつけば、欧米の大学院で3つの修士号を取得するに至っていた。そして大学院終了後も、大学院に在籍していた時とほぼ変わらない学習を日々行っていることもまた、勉強を一度も強制されたことがなく、自ら学びの楽しさと喜びに目覚めた恩恵かと思われる。

幼少時代に知的早産を避けることができたがゆえに、成人以降においても継続的に発達を遂げている自己の姿を見る。こうした継続的な自己涵養の実現と、日々の充実感と幸福感は密接につながっており、それを導くことを手助けしてくれたのが両親からの教育だったのだと改めて思い、この間2人に感謝の念を伝えたのである。

そのようなことを考えながら、先ほどふと、ここからはより意識的にシュタイナー教育の教育思想や教育実践を自らの自己教育として採用してみようと思った。前々から考えていたように、再来年以降に欧州永住権を取得したら、どこかのタイミングでスイスのドルナッハにある精神自由科学大学に入学し、そこでシュタイナーの思想と人間発達実践について学びたいと思う。もう伝統的なアカデミックの世界に戻ることは懲り懲りであるが、精神自由科学大学で学べること、及びその学び方はシュタイナー教育の思想が息吹いており、成人を迎えた自分にとって意義ある学びを得ることができるのではないかと思う。スイスのドルナッハで生活することも今後の展望の一つである。フローニンゲン：
2019/12/11(水)05:09

5329. 感動に打ち震える今朝方の夢

時刻は午前5時半に近づきつつある。今もまだ小雨がパラパラと降っている。起床してから3時間ほどが経つが、まだ日記しか書いていない。そして、それでいいのだと思う。

昨日は、夕方以降に日記を書くことがあまりできず、夕食後に一度日記を書いたぐらいだったかと思われる。それが影響してか、翌朝の今になって、まだ文章を書き留めておこうとする内在的な力が渦巻いている。

もうそろそろ今度は言葉ではなく、音を通じて自分の内的感覚及び命の動きを形にしておきたいと思われるため、今朝方に見た夢だけを最後に振り返り、その後に作曲実践を始めたいと思う。端的には、今朝方の夢は、巨大な感動を引き起こすものだった。

夢の中の私は、あまりの感動に昇天してしまいそうになり、夢から覚めた後の自分もまた、途轍もない感動に包まれていた。夢の中で私は、野原の中にポツンと立つ学校の校舎の中にいた。それは幾分レトロな雰囲気を持つ校舎であった。

ある教室の中に私はいて、その教室には椅子も机も何もなかった。そこにあるのは黒板と、黒板に立てかけられたダンボールだけだった。教室の中には、小中学校を共に過ごした友人の男女が数名いた。しばらくすると、先生らしき人が教室に入ってきて、今から授業を行うことになった。

教室には椅子も机もなかったので、とりあえず私たちは、黒板に立てかけられたダンボールを取ってきて、それを床に敷く形でその上に腰掛けた。そこで始まったのは授業というよりも、クイズのようなものだった。それは歌に関するものであり、1人の女性友達(HS)が先生から出題された問題に回答し、見事に正解をした。すると、そこで夢の場面が変わり、私は欧州の見知らぬ街にいた。街の雰囲気から察するに、そこは中欧のどこかの国であった。

街を散策していると、広場のような場所の一角に人だまりができていた。何かと思って近づいてみると、そこに小中学校時代の友人(KS)がいて、路上パフォーマンスをこれから行うところだった。彼は今からパフォーマンスを始めようとしていたので、私は彼の邪魔をしないように、彼に声を掛けることを後回しにした。彼が何のパフォーマンスをするのかと思っていると、彼は突然、私たちの少年期に流行っていた日本の歌を歌い始めた。それは曲の出だしだけであり、しかもお世辞にも上手いとは言えず、むしろ相当に下手だった。それは広場に集まっていた欧米人たちにも伝わっているようであり、彼らは皆失笑していた。

だが、友人の彼はそれをなんとも思っていないようであり、むしろ今のパフォーマンスは単なる声出だしであり、準備運動に過ぎないという雰囲気を発していた。彼が最初のパフォーマンスを終えたところで、私は彼に声を掛けた。久しぶりの再会に喜びあったのも束の間、私も彼と一緒にその場で歌を歌うことにした。それを決意した瞬間に、小中学校時代の友人が続々とその場に現れ、そこに一大合唱団が形成された。

遠くの人たちにも私たちの姿を見てもらおうと、私たちは三段に及ぶ踏み台にそれぞれが立ち、そこで歌を歌い始めた。最初は、各声部がそれぞれ独立した形で、しかも小さな声で歌を歌っていたのだが、ある時を境にして徐々に声部が一つになっていき、突然に途轍もない声量の歌が奏でられ始めた。歌っている私もそれに驚いてしまったのだが、そこから引き続き歌を歌っていった。すると、またある時を境目にして、もはや想像を遥かに絶するような巨大な歌声が生まれ、それは声楽的な龍のような姿になり、その龍が天高く飛翔していく姿を知覚した。厳密には、私を含め、歌を歌っている私たちは、自分たちの歌声が作り出した巨大な龍と一体となり、昇天をしていったのである。

その龍は天まで、いや宇宙の果てまで届くかのような力と勢いを持っており、歌に込められた魂の果てしなく上昇するエネルギーに観客たちも圧倒されていて、彼らもまた私たちと一緒に昇天を遂げているようだった。夢の中の私の自己意識は、上昇するエネルギーの中に完全に溶解していき、自己意識が完全に滅却した後に、再び自己の本質とも呼べるような一点が現れ、その一点が感動に打ち震えていた。そこで目を覚まし、ベッドの上の私もまた途轍もない感動に打ち震えていた。フ
ローニンゲン:2019/12/11(水)05:44

5330. 音声ファイルを作りながら:言葉に宿る命について

時刻は午後7時半を迎えた。今朝はもう何時に起床したのか忘れてしまうぐらい、一日の始まりは早かったように思う。今朝の日記を確認すると、どうやら今日は午前2時過ぎに起床していたようだ。

振り返ってみると、今日一日もまたいつもと変わらないほどに充実した一日だったように思う。いや、充実感というのも一つの感覚・感情であるがゆえに、自己が日々成熟の歩みを歩んでいるのであれば、それもまた深まっているのだと思う。そのため、今日の充実感は昨日のそれより深く、明日のそれは今日のそれよりもっと深いものになるだろう。

本日の夕方には、来週の金曜日から始まるオンラインゼミナールに向けて、音声ファイルを作成した。前回のゼミナールと同様に、受講者の皆さんから寄せられた質問をクラスの中だけではなく、補助録音教材として音声ファイルを作っていく。

前回のゼミナールを終えてから早いもので3ヶ月経っており、今日は久しぶりに音声ファイルを作った。最初は1人で喋る感覚を忘れていたかと思ったが、いざ話始めてみると、それほど感覚が抜けていないことに気づき、最初から少々喋りすぎてしまったように思える。

今日は5本ほど音声ファイルを作った。ゼミナールを始めるにあたっての事務的な事柄のみならず、リフレクションジャーナルの作り方、シュタイナー教育でいう、自分だけの教科書としての「エポックノート」の作り方、そして第一回目のクラスに向けた事前課題などを中心に話をしていた。明日は、ゼミナール開始前にすでにいただいている質問事項に答える形で音声ファイルを作っているかと思う。

今回のゼミナールのクラスの回数は4回であり、短期集中型であり、前回の8回のものよりも短い。前回のゼミナールでは、2200分近い音声ファイルを作成したが、今回はどれくらいの量になるのだろうか。受講者の皆さんからいただく質問が多ければ多いほどこちらとしても嬉しく、ゼミナールを終えて共有財産としての音声ファイルがどれくらい出来上がるのか楽しみである。そして何より、実際のクラスでの皆さんとのやりとりが今から楽しみである。

「言葉には命が宿っていなければならない」というシュタイナーの言葉を思い出す。その言葉にはシュタイナーの命が宿っていた。命の宿らない生命力の抜けた言葉が跋扈するこの現代社会において、シュタイナーのその言葉は本当に大切かと思われる。シュタイナーの言うように、言葉に命を宿すためには、知的理解だけを通して学ぶのではなく、自分の五感や存在を通した直接体験をとにかく大切にしていくことが求められる。そしてさらに重要なのは、そうした直接体験を咀嚼することを急がずに、それを寝かせることなのだと思う。使い古された言葉かもしれないが、簡潔に言えば、体験を味わうことが真っ先に優先されるべきであり、そこに知的解釈を加えるのは後でいい。体験を寝かせてからでいいのだ。

確かに私はリフレクション(内省)の大切さを認めており、その実践を推奨すらしているが、そもそもリフレクションの対象になるのは、体験が自分の内側で寝かされ、それが心の水面に浮かび上がってきたものではないかと最近思う。リアルタイムのリフレクションであったとしても、体験が一度自分の深部にまで降りて行かない限りは、その実践の意味はほとんどないのではないかとと思われる。つまり、リアルタイムのリフレクションの対象になるものも、やはり一度自分の内側の深部に触れたものである必要があり、そうでなければ、そもそもリフレクションの対象を失い、リフレクションが成り立たないのではないかということである。直接体験を積み、それを寝かせ、寝かせた後に浮上してくるものと深く向き合っていくこと。ヨーロッパでの探究の日々において、その大切さを毎日実感してきたように思う。フローニンゲン:2019/12/11(水)19:49

5331. 大学再入学に関する夢

時刻はゆっくりと午前5時に近づきつつある。今朝は一度、午前2時前に目覚めたが、そこで起きることはせず、結局今日は午前4時に目覚めた。このところは、午前2時から3時の間、あるいは3時半までに起きることが多かったため、4時まで寝ると、相当に睡眠を取ったという感覚がある。今日の

活動に向けての心身の状態は今とても良い。今日はまず今朝方の夢について振り返っておきたい気分であるため、夢をメモした裏紙を眺めながら、今朝方の夢について書き留めておこうと思う。

夢の中で私は、あるビルの中にいた。そこは確かにビルなのだが、雰囲気としては学校のような感じであった。もしかすると、ビルというよりも、小さなホテルと言った方が正確かもしれない。なぜならそこには宿泊施設があり、同時に研修施設もあったからである。

ある研修部屋の中に私はいて、これから駿台予備校の模試を解くことになっていた。私はすでに日本の大学を卒業していたが、もう一度受験し、大学に通い直そうと考えているようだった。

研修部屋は比較的広く、そこには小中学校時代の男女の友人が何人かいて、彼らもまた模試を受けるようだった。中学校時代にお世話になった女性の数学の先生が部屋にやってきて、問題を配り始めた。解答用紙にまずは名前を書いたところ、最初の科目は数学のはずだったが、なぜだか理科の問題が配れていることに気づいた。それに気づいたのは実は少し後になってからであり、実際のところは、右隣に座っていた小中高から長い付き合いのある女性友達(MH)が教えてくれたのであった。

私は先生に、問題用紙と解答用紙が違うことを伝え、先生は「ごめんごめん」と笑いながら数学の問題を配ってくれた。いざ試験が始まってみると、私は数学の一問目からつまづいた。模試を受ける前にほとんど準備をしておらず、私にはそのとき様々な仕事があり、大学受験用の勉強などしている時間がなかった。いや、そうした時間はあったかもしれず、時間を確保しようと思えばなんとでもできたと思うが、生まれた時間は自分の好きなことに使っていたように思う。そのようなことを思いながら問題を解いていたこともあってか、どの問題も一向に答えまで辿り着ける気配がなかった。本来であれば、ざっと問題全体を確認し、解きやすいところから解いていくのが王道だと思うが、私は第一問に執着し、それを解き切ってから次の大問に移ろうと思っていた。

第一問は図形の問題であり、最初の一問目から、高度な幾何学的センスを問うようなものになっており、正直お手上げであった。そもそも、数学の問題に集中するための集中力に欠けており、研修室の部屋の様子などが気になってしまう状態であった。そうこうしているうちに、あっという間に試験時間が終了し、気づけば私は、一問ぐらいしか問題が解けていなかった。得意としている数学の不

出来さには自分でも少々驚き、そして幾分落胆した。そうした感情を幾分引きずりながら、その次の科目である英語の問題を解いていった。ここでも問題が難しく感じ、その後の国語と社会もまた同じであった。

試験が終了すると、すぐに結果が返ってきて、数学の点数はなんと「3/200」と燦々たる出来であった。英語に関しても低調であり、どの科目も一様に低い点数であった。先生は、「今回の問題は難しかった」と言って、私を含め、その場にいた受験者全員を慰めていたが、さすがに自分の点数の低さには驚かざるをえなかった。

返ってきた結果を眺めながら、これから入試本番までにどのように勉強していいか考えていたが、さすがにこのままだと志望校に受からない可能性があり、大学に通い直すのはもうやめにしようかと考える自分がいた。そこで気分転換にトイレに行ったところ、ちょうどそこに、大学時代のゼミの一学年上の先輩(TH)がいて、その先輩も先ほどの模試を受けていたようだったから、お互いの結果についてそこで少し立ち話をした。その先輩は、「正攻法的に、やはり問題は解けるものから解いて行った方がよかったね」と私に述べた。そこで夢の場面が変わった。

大学受験に関する夢を久しぶりに見たように思う。すでに大学を卒業しているのだが、日本の大学に入り直そうとする夢、しかも卒業した母校に再入学しようとする夢を見ることは過去にも何度かあり、大抵はそれがうまくいかない。自分の準備が足りていないことが多く、入試問題がかなり難しく感じられてしまう夢が多々あり、今回もそうした分類に属する夢だったように思う。大学受験をしたのはもう随分と昔のことなのだが、何か当時の出来事が自分の心の奥底に眠っているようだ。それは肯定的なもの、否定的(トラウマ的)なもの双方があるだろう。

また、大学に再度入学しようとする夢の中の自分が何を象徴しているのかも気になるところである。今の私はもうアカデミックの世界に戻ろうとは考えていないのだが、ひょっとすると心のどこかでは、またアカデミックの世界に何らかの形で戻りたいと考えているのかもしれない。それはこれまでの探究領域ではなく、新たな探究領域に関してのことだとは思われるが。フローニンゲン:2019/12/12
(木)05:19

5332. 今朝方の夢の続き

天気予報を確認すると、今日は一日を通して晴れらしいのだが、起床してすぐに通り雨が降った。今はもうそれが止んでいるが、このところは天気の悪い日が続く。過去数年間の冬において、このように雨が續いていたかを考えてしまうほどである。とはいえ、天気の優れない日々を過ごしていると、晴れの日の有難さが身に染みることも事実である。そして、雨の日の持つ趣を認識し始めた今日この頃においては、雨の日における自分の感情は随分と変化が見られるのではないかと思う。今日もまた夕方あたりに、気分転換として近所の運河沿いを軽くジョギングし、その足で近所のスーパーに立ち寄ろうと思う。

先ほど今朝方の夢について振り返りをしていたが、夢にはまだ続きがあったので、それについても振り返っておきたい。先ほど書き留めていた夢は、実はその後の夢と連続していた可能性が高い。

夢の中で私は、四方を学校の校舎に囲まれた中庭にいた。校舎の建物は、あまり親近感の湧くようなものではなく、無機質な建物のように感じられた。中庭を横切って向こう側の建物に行こうとしたところ、近くにいた友人が私を止めた。中庭は一種の戦場と化しており、そこでは静かながらも確かに銃撃戦が繰り広げられていたのである。誰と誰が銃撃戦を行っていたのか気になったところ、友人の話に基づけば、中欧のどこかの国と西欧のどこかの国の人たちが争っているようだった。その背景には、中欧の国が西欧のその国から抑圧されてきた歴史があるようであり、今ここでその恨みを晴らし、完全なる独立を果たそうと考えているようだった。

「銃撃戦」と述べたのだが、それは実際には、中欧の国が一方的に西欧の国に対して攻撃を仕掛けているような状態だった。というのも、中欧の国の人間はライフル銃を携えているのに対し、西欧の国の人たちは銃など持っておらず、全くの無防備だったからである。

中庭にいる西欧の国の人たちが少しでも不穏な動きをしたら、中欧の人間たちは迷わず彼らを射殺した。そのようなおぞましい光景が目の前に広がっていた。友人と私は、その場から一刻も早く離れたかったのだが、動くに動けない状態だった。私たちの外見はアジア系であり、分かる人であれば日本人だと分かってもらえるかと思っていたが、なんと中国人もその場で射殺されていたので、

中国人に間違われてはならないと思い、うかつに動けなかった。過去に中国もその中欧の国を支配した歴史があるとのことだった。

中国人と間違われて射殺されては元も子もないと思いながらも、その場でじっとしていても何も始まらないと思ったため、私は慎重を期して、中庭をそろりそろりと歩いていった。幸いにも銃撃戦も落ち着いてきており、無事に反対側の建物の方に辿り着いた。しかしそこでも、何人かの西欧人が捕まっている姿を見て、まだまだ危険な状況にあるのだと理解した。そこで私は、空を飛び、ここから脱出しようと考えた。

不穏な動きと思われないように、私は少しずつ、慎重に自分の腕をバタつかせ、宙に浮かび上がっていった。そしてそこから建物の向こう側に飛んで行こうと思ったのだが、思うように高度が上がらず、結局再び地上に降り立つ形となった。再度下手に飛ぶと撃ち殺されてしまう危険性があったので、これはもう地上で大人しくしていようと思った。

中庭の外壁に沿って静かに歩いていると、アフリカ系の親子に遭遇した。母と2人の娘がそこにいて、3人は少し心配げな表情を浮かべていた。彼女たちの表情を見たとき、何とかその場の雰囲気明るくしてあげようと思い、私は彼女たちに話しかけ、そして空を飛ぶときの動作を見せてあげた。すると、5歳ぐらいの女の子が笑顔になり、私の動きを真似し始めた。その子の姉だと思われる女の子は中学生ぐらいであり、彼女は私に声をかけてきて、壁にかけられていた一文字の漢字の意味を尋ねてきた。壁には「働」という漢字が絵画作品のようにかけられていた。その漢字の意味を説明する際に、「人が動くということが「働く」という意味なんだ」と私はその子に教えた。すると、その子は笑みを浮かべ、何か納得したようであった。

そこで夢の場面が変わり、私は海岸線を走る車の後部座席にいた。私の左横には、小中学校時代の女性友達(MN)がいた。私は、ぼんやりと車の窓越しから、移りゆく海岸線の景色を眺めていた。すると、深い安堵感が生まれた。

どうやら一つ前の夢で舞台となっていた戦場から無事に脱出した自分がそこにいて、自分がまだ生きていることの喜びを静かに噛み締めているようだった。しばらく車内は静かだったが、あるときふと、隣に座っている友人が口を開いた。

友人:「それにしてもドイツは大きいね。オランダの大きさはこれっぽっちしかないのに」

友人はドイツの大きさを両手で示し、オランダの大きさを右手の親指と人差し指の2本で示した。友人は続け様に、「確かにオランダはこれっぽっちの大きさしかないんだけど、創造的なものが日々生まれ、みんな元気に見えるよね。それに比べて日本はあれだけ人口がいるのに、どうしていいものが生まれてこないのかしら。それと元気がないのも心配だわ」と述べた。私は彼女が述べたことに同意しながらも、幾分やるせなさを感じながら移りゆく海岸線を眺めていた。フローニンゲン:2019/12/12(木)05:56

5333. ヨーゼフ・マティアス・ハウアーとの出会い

時刻は午前6時を迎えた。今日は晴れとのことであるが、朝日が昇るまでにあと2時間半ほどはかかりそうである。先ほどまで夢の振り返りをしていたが、そういえば、また別の夢の中で、12音技法を活用して作曲をする際には、もう少し慎重に音を選ばないといけないと知人から言われていたの思い出す。そのフィードバックを受けたとき、自分もそのように思っていたので納得した。一方で、そのフィードバックをあまり気にしすぎないようにした方がいいとも思った。

夢の中で12音技法が出てきたのは、ひよつとすると、昨日の午前中に、ヨーゼフ・マティアス・ハウアー(オーストリアの作曲家:1883-1959)について調べていたからかもしれない。ハウアーは、アーノルド・ショーンバークよりも先に12音技法を提唱したと言われることで有名である。実際にハウアーが作ったピアノ曲を聴いてみると、ショーンバークのピアノ曲よりも共感するものがそこにあった。私の感性はどちらかという、ショーンバークのものよりも、ハウアーの感性の方に近いのだと直感的に理解した。

そこからハウアーについて調べてみると、ハウアーがゲーテの色彩論や中国の易経などの探究を行い、その探究成果を曲に活用していることを知った。それを知ってますますハウアーについて関心が高まると、ハウアーが神秘思想を探究し、中でもシュタイナーの思想に共感の念を持っていたことを知るに至った。そのときふと、静かではあるが、自分の内側で何かがつながる感覚があった。ハウアーの音楽との出会いの背景には、目には見えない縁が横たわっているように思えたのである。

12音技法を用いてハウアーが作ったピアノ曲を聴いてみたところ、その美しさに驚いてしまった。とかく奇妙な響きばかりを生み出してしまいがちな12音技法を用いながらも、このように美しい曲を作れることに感銘を受け、どのような発想と技術でそのような曲をハウアーが作ったのかを知りたくなった。そこで文献を調べてみたところ、“Serial Composition and Tonality: An Introduction to the Music of Hauer and Steinbauer (2011)”という大変興味深い書籍を見つけた。ショーンバーグに関する書籍は数多くあるが、ハウアーに関する書籍は少なく、しかもそれがドイツ語ではなく英語になるとなお数が少なくなってしまう。その書籍を購入しようと思ったところ、アメリカやイギリスのアマゾンでは入手不能という珍しい書籍だった。幸にも、運命的に1冊だけドイツの書店にあったので迷わず購入することにした。

12音を用いて霊的な世界を表現することに苦心したハウアーの音楽にこれから徐々に親しんでいき、彼が体得した音楽書法から多くのことを学びたいと思う。ハウアーのように、作曲というものを無限に広がる世界との交流とみなし、個人的な自己表現から、献身や観想に変容させていく試みに従事していきたい。フローニンゲン:2019/12/12(木)06:30

5334. ルシファーとアーリマン: 目には見えない霊的存在を認めることについて

時刻は午後の4時を迎えた。今日は天気恵まれ、今、遠くの空に暮れゆく太陽を拝むことができる。

朝とはまた違った質感で、小鳥たちが鳴き声を上げている。いつも彼らの鳴き声を聞くたびに、心が洗われるかのような気持ちになる。天高く昇っていく声と共に、自分も天に近づいていくかのようだ。

そのようなことを考えていると、思想家のシュタイナーが提唱している2つの悪魔のことが思い出された。それは、高きものに私たちが執着させるルシファーと、俗物的なものに私たちが執着させるアーリマンの2つである。1人の人間には、どちらの悪魔的かつ霊的な存在が内包されているが、ここ最近の私には、ルシファー的な力が幾分強く働いているのかもしれないという自覚がある。高きものが発する美の中で陶酔感を感じる事が日々の生活の中で見られることから、ルシファー的な力が今の自分に強く作用しているのだろう。

ルシファーもアーリマンも、繰り返しになるが、シュタイナーはそれらを高次の霊的存在として捉えており、それらは「悪魔」と括られているが、単純にそれら自体を悪だとはみなすことはできない。2つの悪魔の中間に位置する私たちが、そうした悪魔のどちらか一方に偏りすぎた場合に、私たちはその悪魔に囚われて墮落していく。

一昨日あたりにふと、目には見えないもの、とりわけ神秘主義思想などにおいて霊的な存在とみなされるものを極端に否定する人たちについて考えを巡らせていた。実は私たちが生活をしていく中で、目には見えないものは無数にあり、それこそ愛や美といった抽象的な概念はそもそも目には見えないし、私たちの肉体に常に働きかけている重力も目には見えない。それらの目には見えないものと霊的なものを一緒くたにするのは乱暴だが、それらはいずれも目には見えないという共通性を持っていることは確かだろう。

私は、重力のような物理次元の目には見えないものの存在をもちろん信じ、心理的次元における概念や観念のような目には見えないものの存在もまた信じている。そこから、さらに高次の霊的次元を考えてみたときに、その次元に目には見えない存在があることを考えることはそれほどおかしなことではないように思えてくる。もちろんそう思うことの背後には、概念や観念の次元よりも高い次元が存在しているということが前提となっているのだが。

私は、概念や観念を超えて、霊的な存在を認めることが、私たちの行動を変え、それによって私たち自身の生活や人生がより豊かになるのであれば、目には見えない霊的存在を認める方が望ましいのではないかと思えてくる。例えば、食べ物一つに神や仏が宿っていると考えることができれば、食べ物との向き合い方や食事の質に何か変化が生まれやしないだろうか。人との出会いの背後に、目には見えない霊的な力が働いていると考えることができれば、感謝の念が生まれたり、人との出会いとそこからの関係性を大切にしないだろうか。

霊的な存在を盲信するのではなく、霊的な存在も物理次元や心理的次元の目には見えないものと同様に存在するのだと当たり前のように思うことができたのであれば、物質的なものや心理的なものを逆に毛嫌いするスピリチュアルなものへの偏狭から逃れることができ、私たちの生活や人生により彩りや実りがもたらされるのではないだろうか。

目には見えないものに思いを馳せ、その存在を認めることができること。それは私たちの日々の行動や考えを変え、それらを深めてくれるのだと思う。そしてそれは、私たちの日々の生活や人生をより豊かなものにしてくれるのだと思う。フローニンゲン:2019/12/12(木)16:28

5335. コミュニケーションと私たち

時刻は午後の4時半を迎えた。今は冬真っ盛りであり、これからまだまだ気温が下がっていくのだが、その一方で、夕日が沈む早さのピークはもう過ぎたように思われる。今この時間帯においてもまだ辺りは薄暗さを保っており、遠くの空には暮れゆく夕日を拝むことができる。そうした夕日を見ると、ホッと一息つくことができる。天気が悪い日が続く分、なおさら夕日が拝めることを有り難く思う。

一昨日、協働者の方たちとオンラインミーティングがあり、そこではコミュニケーションの質が話題に挙がった。そして偶然ながら、その前日に友人かつかかりつけの美容師のメルヴィンに髪を切ってもらっているときにもコミュニケーションの質が話題となった。そして昨日は、私の配慮不足から、少々ミスコミュニケーションが生じてしまう出来事があった。

社会的な生き物として私たちが生きていく中で、コミュニケーションは必須のものであり、それは私たちの人生を豊かにすることもあれば、ミスコミュニケーションによって種々の問題を引き起こす。コミュニケーションもまた、インテグラル理論のAQAL的に様々なものが考えられる。私たちは、対人間だけではなく、対物質、対文化、対制度などの様々な相手に対して、ラインもレベルも実に多様なコミュニケーションの網の目の中で生きていることがわかる。全ての対象に対して高次元のコミュニケーションを発揮できる人など皆無であり、私もまたそうだと深く反省させられるような出来事があった。ちょうど私の友人が、コミュニケーションをテーマにした書籍の執筆を進めており、改めてその書籍の意義を知る。

もう少ししたら入浴し、夕食の準備を始めるが、まさに食べ物とのコミュニケーションがそこには存在している。欧州で暮らす日々が進行していくに従って、死というものについて考える機会が増えているが、そこには死とのコミュニケーションの問題が存在している。先ほどの日記で書き留めていた霊的な存在についても、そうした目には見えない存在との間におけるコミュニケーションの問題が存在している。

一つの主体として存在する私たちは、主体以外の無数のものとのコミュニケーションによって日々の生活が成り立っており、私たちの存在も、そうした無数のコミュニケーションから逆定義されるのではないかと思われるほどだ。他の一切の存在者と主体を切り離し、主体単独でその存在を定義しようと思ってもそれは不可能なのだろう。

コミュニケーションは、私たちの心を暖かくもしてくれるし、不快にもさせる。そうしたことを思うことが直近にあったため、このテーマについては今後も考えを深め、コミュニケーションの質を高めていくような心掛けと実践を絶えずしていきたい。どの領域の何に対して自分がコミュニケーション能力が極度に低いかは昔から見えていたのだが、それをこれまでずっと放置していたように思う。それが昨日のミスコミュニケーションを生んでしまったのだと思われるため、ここから考えを改め、行動を変えていこう。フローニンゲン:2019/12/12(木) 16:51

5336. 贈り物を通じた喜び

つい先ほど夕食を食べ、今からメールの返信を済ませてから、少しばかり読書をしようと思う。年末年始にかけて読もうと思っていた本が、幸いにも続々と届き始め、未着のものはあと2冊になった。現在はまだションバーグの“Style& Idea: Selected Writing”を読み進めている最中だが、もう少しで読み終わるので、明日か明後日からは、コリン・ウィルソンが執筆した“Poetry and Mysticism”かピエール・ブーレーズが執筆した“Music Lessons: The College de France Lectures”を読み進めていこうと思う。前者の書籍は、年末にマルタ共和国を訪れる際に持参しようと思っていたが、そこまで待ちきれないので、もう読んでしまおうと思う。

マルタ共和国への訪問について言及した瞬間に思い出したが、年末にマルタに行く前に、部屋の大掃除をしたいと思う。ここで一度大掃除をして、部屋をもう一度全体的に綺麗にしたい。普段からフロアやトイレの掃除は欠かさずに行っているが、細かな点についてはあまり掃除が行き届いていないと思われるため、2019年を締めくくるためにも大掃除を行いたい。それによって、来年にはまた良いエネルギーが部屋にやってくるだろう。

夕方の方の日記の中で、コミュニケーションに関して言及していたように思う。昨日に発生してしまったミスコミュニケーションについて考えていると、そうしたミスコミュニケーションの背後にはやはり自分自

身の思い込みやシャドーの問題が見え隠れしている。逆に言えば、ミスコミュニケーションは、まだ客体化されていない発想の枠組みやまだ内側で統合されていないシャドーの存在を教えてくれる。昨日の出来事はそのような機会だったと捉えている。自分が常識と思っていることが他者にとっては全くもって常識でなかったり、自分自身の中にある思わぬシャドーに気づかされる形になった。少しばかり心の波が揺れたが、今回の体験を通じて得られたことは大きい。

今日は午後3時あたりに、散歩がてら街の中心部にあるお茶・コーヒー専門店の“Simon Lévelt”を訪れた。この店は、なんと200年近い歴史を持っており、店が始まったのは1826年とのことである。この店は、フローニンゲン大学のシンボルでもあるレクチャーホールと図書館の近くにあり、店に足を運ぶ際には、フローニンゲン大学のそれらの建築物を懐かしく眺める自分がいる。

本日その店に訪れたのは、この間購入したコーヒー豆が切れかかっているためと、それ以上に重要な理由としては、友人かつかかりつけの美容師であるメルヴィンにコーヒー豆をプレゼントしようと思ったからである。メルヴィンにはスシというガールフレンドがいて、あと数日で交際4周年の記念日ということだったので、それに見合うコーヒー豆を選び、それをプレゼントすることにした。店に到着し、まずは自分の豆を選ぶことにした。前回とは異なる豆を試してみようと思い、今回はエチオピアのオーガニックコーヒー豆を購入することにした。

この店に置かれているほとんどのお茶やコーヒーはオーガニックであり、今日もまた親切な店員さんに声をかけてもらい、そのあたりの事情についても話を伺ってみた。店としても、オーガニックなものを作る生産者を応援したいという気持ちが伝わってきた。消費者である私も同じ気持ちを持っている。この店には数多くのコーヒー豆があるため、今度はより深みのある味のコーヒー豆を購入してみようと思う。次に、メルヴィンとスシにプレゼントするコーヒー豆を選ぶことにした。

2人ともコーヒーが好きであることを知っていたので、ぜひ記念日も含めて、2人で一緒にコーヒーでも飲んでくつろぎながら語り合っほしいと思った。2人にプレゼントするものとして、クリスマス用の特別なコーヒー豆であり、いくつかのオーガニックコーヒー豆がブレンドされているものを選んだ。プレゼント用のコーヒー豆を選んでいる時にふと、こうして誰かに渡す贈り物を選んでいる自分が喜びを感じていることに気づいた。そして、店員さんが親切にもそれはプレゼント用かと尋ねてきてくれたので、その旨を伝えると、綺麗に包装紙に包み、リボンを付けてくれた。贈り物が包装紙に包まれ

ていく姿を見ていると、さらに嬉しさの感情が湧いてきた。そして店を後にして、メルヴィンの店に立ち寄る際にも、心が弾んでいた。贈り物というのは、選ぶ際、そしてそれを届ける際にも喜びの感情が得られるのだと改めて気づいた。

そのお茶・コーヒー専門店とメルヴィンの店は歩いてすぐの距離にあるため、メルヴィンの店に立ち寄ると、ちょうどメルヴィンが休憩中だったので、早速プレゼントを手渡した。贈り物を選ぶ時、それを相手に持っていく時のみならず、いや、やはりそれ以上に、実際に贈り物を相手に手渡し、相手が喜んでくれる姿を見た時に、喜びの感情が絶頂に達するのだと思った。

メルヴィンと少しばかりその場で立ち話をし、2人の交際4周年記念を祝ったところで、店を後にした。店を後にして自宅に戻っている最中にも。喜びの余韻にしみじみと浸っている自分がいた。フ
ローニンゲン:2019/12/12(木)20:04

5337. 今朝方の夢

起床直後から小雨が降っており、午前7時を迎えようとしている今もまだ雨は降り続けている。今日の最高気温は3度、最低気温は2度とのことであり、両者の間に差がほとんどない。午前中から昼過ぎにかけては雨が止むとのことなので、そのタイミングを見計らって、近所のスーパーに行こうかと思う。

それではいつものように、今朝方の夢について振り返ってから、早朝の作曲実践を始めたい。夢の中で私は、小中学校時代を過ごした社宅にいた。時間帯は朝であり、これから小学校に向かう必要があった。それは別に小学校で生徒として授業を受けるためではなく、何か別の用事があるようだった。すると、社宅の下から誰かの声が聞こえてきた。窓の方に近寄ってみると、それは小中学校時代の2人の親友(HS & SI)だった。彼らと一緒に小学校に行く約束をしていたことを思い出し、身支度を済ませてからすぐに降りていく旨を彼らに伝えた。もう準備はほぼ完了していたので、あとはカバンに詰め忘れた物がないかを確認するだけだった。

時計をふと確認すると、午前8:55を指していた。1人の親友は、どうしても9:30までに学校に到着したいとのことであり、少し焦っているようだった。しかしうちから学校まで自転車に乗っていけば、30分以内で到着できてしまうため、なんら問題ないと私は思った。念のため、9:25までに到着するよう

なペースで学校に行こうかと私は彼に提案した。すると、その親友は安堵の表情を浮かべ、「ぜひ」と述べた。自転車の走る速度を少し上げれば、9:25と言わず、9:20までに着くことも可能だと思ったが、そこまで飛ばさなくても大丈夫かと思い、2人に自分の後ろについてきてもらう形でいざ出発した。

すると、あるところから突然、私たち3人は自転車ではなく、父が運転する車の中にいた。どうやら父が私たちを学校まで送り届けてくれるようだった。自転車ではなく車であれば、もっと早く学校に着けてしまうため、とても有り難いと思った。

車はしばらく順調に走っていた。だがあるところから、見慣れない山道に車が入っていき、沼地周辺の行き止まりにぶつかった。途中、国道から左折して山道に入っていこうとした時に、私は何かおかしいと感じており、それが的中する形となった。確かに、カーナビではその山道に進むように表示されていたのだが、そのまま国道を走っていくのが正しいルートなのであった。沼地の行き止まりにぶつかった時、父は落胆の表情を浮かべていた。そこで私は、すぐさま正しいルートに戻れば問題ないということをお父さんに伝えた。そこから車は来た道を引き返して行った。

国道に戻る直前に、小さな小川が流れている箇所があった。その小川の上を通る形で、一本の橋のような道が作られていた。その道にはガードレールも何もなく、そして細かったため、ちょっと運転を誤ると、小川に落ちてしまう危険性があった。どういうわけか父はその道を通るのではなく、山道から下りてくる力を利用して車を宙に浮かし、車を飛ばす形で対岸に到着しようとした。それはかなりのスリルであり、本当に無事に対岸に到着できるのか少し不安があったが、なんとか無事に対岸に着陸した時に夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、様々な施設が合併した宿泊施設の中にいた。そこには温泉があり、セミナールームがあり、映画館があり、レストランなどがあった。最初私は温泉に入っていた。しばらくすると、見たことのある男女が温泉の更衣室にやってきた。その後ろに撮影用の器具を持った人たちが大勢いて、どうやら2人は俳優のようであり、これからドラマの撮影があることを知った。どのようなドラマか気になったので、温泉から上がった私は、湯冷ましも兼ねて、ドラマの一つのシーンの撮影を見届けた。温泉を出た後に向かったのはセミナールームである。それは自分の意思で向かったという

よりも、その時の私は研修か何かでこの施設を訪れているようであり、今から行われるセミナーに参加することが義務付けられていた。

セミナールームに到着すると、そこはだだっ広い畳部屋だった。すでにそこには多くの人がいて、見ると彼らは全員、小中学校時代の友達たちだった。部屋の半分を男子が座り、もう半分は女子が座る形となっていた。一体誰がこれからセミナーをするのだろうかと思っていたところ、1人の浴衣を着たスキンヘッドの中年男性がやってきた。その人は見るからに柄の悪そうな風貌をしていたが、実際に話始めてみると、確かにストレートな物言いではあるものの、それほど柄が悪い人でもなかった。その人の話のテーマは投資であり、私たちから出てきた一つ一つの質問に対して、その人が回答していく形でセミナーが進められていった。どの質問にも、簡潔でありながらも誠実に答えようとする姿勢がその人から伝わってきた。

ある質問に回答し終えた後、窓際の一番端の列に座っていた友人(TF)が突然拍手を始めた。彼にとって、その男性が今行った回答に何か響くものがあったのだろうか。友人のその拍手は、周りの男子たちの拍手を誘い、彼らも一様に拍手をし始めた。そして、女子たちもそれに応じるう形で拍手を始めた。しかし、女子たちはその回答に対して拍手が起きていることを理解していないようであり、講演が終わったと思い込んで拍手をしているようだった。

盛大な拍手によって、講演を行った男性は照れ笑いを浮かべていた。しかしその中で私だけは拍手をしておらず、手に持っていた何か筒状のものを左右の掌の上で転がしながら沈黙していた。すると、その男性は私に声を掛けてきた。その瞬間に私の体はもうセミナールームの外にいた。

ちょうど夕食どきが近づいていたため、施設内のレストランのどこかで夕食を撮ろうかと思った。しばらくフロアを歩いていると、小中高時代の女性友達の1人(YY)ともう2人ほど見知らぬ女性たちと遭遇した。ちょうど彼女たちもどこかいいレストランがないかを探しているようだった。私たちは一緒に夕食を撮ることにし、フロアをまた歩き始めると、いつの間にか私たちの体はあるレストランの厨房の中にいた。その厨房には、何人かの男女の調理人が料理を作っていた。

私の友人はそこでなんと、出来上がった料理の皿を一つ手に取り、それを厨房の外に持って行って食べようとしていた。見ると、一緒に歩いていたその他の女性たちも同様に、各自皿を勝手にとつ

て厨房の外に出ていこうとしていた。私は少し唾然としながら引き続き彼女たちとレストランの中を歩いていた。厨房を抜け、支払いカウンターのところまでやってくると、そこでも彼女たちは驚くべきことに、一切お金を払わずにレストランの外に出て行った。支払いカウンターを見ると、そこには認知症を患っているかのような老女がいて、私たちの方を見て微笑んでいた。

勝手に食べ物を持ち出して大丈夫なのかを友人に尋ねてみたところ、大丈夫とのことであり、友人はレジを担当する老女が認知症を患っていることを知っており、私たちが何を持ち出しても気づかれることはないと言った。すると私の体は突然、またしてもセミナールームにいた。今度は先ほどとはまた違うセミナールームのようだったが、畳部屋であることには変わりなく、そこまたとても広い空間だった。そこでは、友人たちが代わる代わる壇上に上がり、自分の思いを1人で発表することが行われていた。

私は畳の上に座りながら、彼らの発表を楽しく聞いていた。ある友人の発表が終わり、今度の発表は高校時代に仲の良かった友人(HH)が行うことになっていた。彼の発表が楽しみであり、何を話すのか期待していたところ、彼は壇上に上がるやいなや、私の方を一瞬見るかのようにして、「ヨウヘイ、明日からお前は来なくていい！」と大声で叫んだのである。そして彼はそれだけを述べて壇上から降りた。

私は少し唾然としてしまった。その場には、私以外にも「ヨウヘイ」という名前の友人がいたし、今壇上で発表した彼は、普段私のことを「加藤君」と呼んでいたもので、彼が述べた「ヨウヘイ」が一体誰を指しているのかよくわからなかった。彼とのこれまでの関係性を考えると、私のことではないと思ったが、発表の前に彼は私の方をちらりと見たような気がしたので、もしかしたら自分のことなのではないかと思ってしまった。

それに気づいた時、なぜか私は彼を2、3回殴り飛ばし、その発表を聞いて笑っていた数人の友人たちを2、3回蹴り飛ばしていた。彼らは全員畳にうずくまりながら悶えており、私が仮にあと数回ほど暴行を加えていたら、彼らは死んでいただろうと思った。そこで夢から覚めた。フローニンゲン：

2019/12/13(金)07:36

5338. 心身の調律とシャドーワークについて

毎朝、あるいは活動の節目節目に、心身を落ち着かせ、心身を調律させていく。調律が歪むのは簡単であるが、調律を整えるのは難しい。社会の中で生きていくと、調律がいつも簡単に乱れてしまうのは不可避なのかもしれないが、少なくとも、調律の歪みにすぐさま気づき、それを整えていくということをしていきたい。そして少しずつ、弦をより強固かつしなやかなものにしていき、小さなことで調律が乱れないようにしていくことも大切だろう。

先ほど、今朝方の夢について書き留めていた。夢をメモした紙には、それほど多くのことが書き残されていなかったのだが、キーワードを拾っていくと、次々と夢の場面が映画のように映像を伴って思い出されていき、いつも以上に分量の多い振り返りだったと思う。特に印象に残っているのは、やはり夢の最後の場面だろうか。仮に夢の中の友人が、あの発言を私に向かって行ったとしたのであれば、それは少々心が痛む。本音で言えば、彼は間違いなく、私に向かってあの発言をしていたのだと思う。

その後を取った私の行動もまた印象に残っている。表情は幾分笑みを浮かべ、頭は冷静でありながらも、やはり内側には怒りのような感情があり、それが別の感情に変容する形で生み出されたエネルギー、あるいは怒りの感情が歪むことによって新たに生まれた別の感情のエネルギーがあり、そのエネルギーの赴くままに、彼とその発言を笑った友人たちを瀕死の状態にまで殴打している自分がいた。

壇上で発言をした友人に対しては拳で2回ほど腹を殴り、肘で背中を叩き下ろした。彼の発言を聞いて笑っていた2、3人の友人に対しては、一様に腹に蹴りを入れた後、かかとで背中を叩き下ろした。その後私は、一応彼らが死んでいないことを確認し、うずくまりながら虫の息をしていて少しホッと、後1回でも暴行を加えたら死んでしまうと思ったので、もうそこからは何もしないことにした。その場にいた他の友人たちは一様に唾然としており、怯えた目で私の方を見ていた。そのような場面について改めて思い出す。

つい先日、自分の中にまだ眠っていた新たなシャドーの存在に気づく出来事があった。その出来事について色々と考えを巡らせてみたり、内面と向き合うことを続けていた。そのシャドーをすぐに

自分の内側に統合できないだろうと思われたため、ある程度の真剣さを持ってそれについて考えるに留め、それほど深刻に考えることをしないようにした。

様々な人と社会生活を送っていると、それに伴ってシャドーが形成されていくのは必然であり、シャドーが姿を表すのも必然なのだと思う。ひよつとすると、私は今、改めてシャドーワークを真剣に行う時に差し掛かっているのかもしれない。その一つの手段として、今行っているように夢日記を書いていくことは有益だろう。書かれた夢に対しても、実はそれを題材にしてあれこれとインナーワークを行っているのが、それについても書き留めてみるのもいいかもしれない。今はシャドーの最良の源泉である夢を題材にして、シャドーワークをより深いものにしていこうと思う。

際限なく存在するシャドーと向き合うことはおそらく一生続くのだと思われるため、焦ることなく、緩やかに、そして着実に自分の内側のシャドーを見つめていきたいと思う。そして、健全化されたシャドーを再所有することを通じて、自己の内面をさらに育んでいく必要があるように思われる。フローニンゲン:2019/12/13(金)08:08

5339. ゼミナール用の音声ファイルを作りながら

時刻は午前2時半を迎えた。今朝は午前2時前に起床し、幾分早い起床となった。やはり先日行った14日間の断食のおかげだろうか、断食以降、身体の状態が極めて良好であり、短い睡眠で大きな回復が得られるような身体がここにある。断食によって身体上のデトックスが行われたことによって、睡眠の質を低下させていたものまでもがデトックスされたかのようなようである。まさに、生まれ変わった内臓器官が少量の良質の食べ物から最大限に栄養を摂取するかのようになり、少量の睡眠によって最大限の回復効果を得ることができるような身体がここにある感覚である。

過去の偉大な創造家の多くが朝の時間を大切にしたように、私も朝の時間を大切にしておき、起床から昼までの時間が多く確保できることは本当に嬉しいことである。ここから正午まで9時間ほどの時間があり、その時間は全て創造活動や読書に充てることができる。午前中の段階でもう十分に、自分が大切にしている取り組みに邁進できることほど大きな喜びはない。

昨日は日記を書く量が少なかった。日記を書いたのは目覚めた時だけだったように思う。普段は大抵、日中に何か考えが浮かぶ都度日記を書いたり、夕方や夜に一息ついた時に日記を書くことが

多いのだが、昨日はそれがなかった。その理由としては、昨日は、来週末から始まるオンラインゼミナールの「実践編」に向けて、音声ファイルを作っていたことが挙げられる。ゼミナールの開始前であるにもかかわらず、受講者の方からすでに有益な質問が寄せられており、それらに答えることを昨日の夕方から夜にかけて行っていた。もちろん質問によって事前に回答を考えたりはするが、ほとんどの場合は、質問を読み上げながら回答していくというスタンスを取っており、事前に録音時間がどれほどになるかは予想できない。昨日も、思っていた以上にかなり長時間に及ぶ形で音声ファイルを作っていたように思う。

前回のゼミナールでは、様子を伺いながら音声ファイルを作っていたため、前半の音声ファイルはそれほど長さがなく、徐々に長くなっていったように思う。今回に関しては、最初から少しばかり長い音声ファイルになっているように感じられる。一応、各ファイルにナンバリングするだけでなく、タイトルを付け、何分間の長さなのかをエクセル上で管理しており、それを見ると、やはり前回のゼミナールの音声ファイルよりも長い傾向にあるようだ。いただいた質問に対して、少し時間を空けて補足事項を説明したり、参考文献を紹介していると、ファイルの数も増えていく形となった。

今日もまた夕方あたりに、未回答の質問に答えていきたいと思う。今回のゼミナールは4回のクラスしかないため、クラス以外の学びを充実したものにするために、音声ファイルを積極的に作成していきたい。フローニンゲン:2019/12/14(土)02:55

5340. 今朝方の夢

時刻は午前3時半を迎えた。ここからあと5時間ほどは闇の世界が続く。

数日前に寒い日があったが、12月に入ってみて、まだそれほど寒さを感じることは意外にも少ない。これまでのところ、マイナスの気温になった日はまだ少なく、日中に外に出かけても、それほど寒さを感じることはない。オランダの大抵の家の室内は暖かい設計になっているため、室内にいて寒さを感じることもほとんどない。おそらくこのフェーズがひと段落し、年末あたりから寒さがまた増してくるのかもしれない。去年の年末はオランダで過ごしていたのだが、その辺りの事情を忘れてしまっている。いずれにせよ、寒さのピークは1月や2月に迎えるため、どこかのタイミングで寒さがグッと増すことになるだろう。

それでは今朝方の夢の振り返りをした後に、早朝の作曲実践に取り掛かりたい。夢の中で私は、実際に通っていた小学校の中庭にいた。そこは高学年用の建物の中庭であり、そこで大学時代に知り合った友人(TY)と話をしていた。彼は、学業が優秀なだけでなく、運動神経も頭抜けており、まさに文武両道という言葉にふさわしい友人だった。体も健康で強い印象があったのだが、どうやら最近彼は思わぬアクシデントに見舞われて、腕を骨折してしまったそうだ。実際に彼はその時まだ包帯を巻いており、腕を動かすのが不自由そうだった。

彼と少しばかり会話をした後に、私は中庭を離れ、学校の外に出た。ちょうど学校の前には小さな公園があり、小学校時代に遊んでいた滑り台を懐かしく眺めながら、自宅に向かって歩き始めた。すると、私の後ろから1人の友人が声をかけてきた。彼は息を荒くしており、私に何かを急いで伝えるに来てくれたようだった。

開口一番、彼は自分の携帯を取り出し、スマホの画面を見せてくれた。そこに映っていたのは、ある暗号資産の銘柄のチャートだった。その暗号資産を私も保有しており、彼がそのチャートを見せてくれた時には、相変わらずその銘柄の価格は停滞していた。ところが、彼がその暗号資産の価格が今からとんでもない勢いで動き出すということを述べた。私は半信半疑でそれを聞いていたのだが、ほんの数秒後に、彼が言った通り、これまで停滞し続けていたその銘柄の価格が動き始め、突然大きな上昇を遂げたのである。私はそれに驚いてしまい、その値動きがあまりにも激しいものだったから、思わず笑ってしまった。おそらく大口の投資家が大量に注文を出し、それに追随する形で小口の一般投資家が注文を入れたのだと思われた。

私もその銘柄を保有しており、売却タイミングをどこにするかは事前に決めていた。その銘柄の価格が今日の前で大きく動き出したとは言え、売却価格として設定している金額にまだ満たなかったもので、私は静観していた。すると、自分が想定していた売却価格のラインに触れる瞬間があり、そこから瞬く間に価格が上昇していった。それを見て、売り注文を出そうと思ったが、如何せん値動きが激しく、それは上にも下にも激しく乱高下することを意味しており、すぐさま価格はまた元の水準に戻っていかうとしていた。

激しい値動きの後、その銘柄の価格は以前よりも2倍ぐらいの水準で止まった。それを見て私は、売却することを取り消し、また気長に売却価格に達するまで待とうと思った。その暗号資産の価値が

世に認められ始め、実際に活用され始めている様子を見ていたため、ここからまた価格が徐々に上向きになっていくのではないかと思われた。その一件は、それを示唆していると思ったところで夢の場面が変わった。

最後の夢の場面では、私は船着場のような場所で、小中高時代の友人(HY)とサッカー元日本代表のある方(HN)と一緒にサッカーをしていた。実際にはもう1人誰かいたのだが、それが誰だかはあまり覚えていない。

私たち4人は、2対2をしていた。その船着場にはサッカーゴールなどなかったため、その辺に落ちている空き缶を集めてきて、それを地面に立てる形でゴールに見立てた。2対2のゲームを最初は和気藹々と楽しんでいたのだが、お互いに徐々にヒートアップしてきて、全員相当に真剣な表情でプレーをし始めた。サッカー元日本代表の方は、現役時代はフィジカルが強く、海外選手に当たり負けしないことが特徴だった。実際にそれがどれほどなのかを確かめたかったため、私はその方にかなり激しくタックルを試みた。

すると、現役を退いた今も、当時のフィジカルの強さが健在であり、タックルを仕掛けた私は逆に弾き返されてしまった。それを体験した時、「やっぱりフィジカルが強いな」と私は思わずつぶやき、笑ってしまった。そのつぶやきはその方に聞こえていたようであり、その方も笑った。そこからはまた和気藹々とした雰囲気の中で楽しくボールを蹴ることになった。フローニンゲン:2019/12/14(土)03:46